

令和4年度病害虫発生予報第7号

令和4年8月24日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病（穂いもち）	—	平年並
		紋枯病	—	平年並
		トビイロウンカ	—	少ない
		斑点米カメムシ類	—	平年並
普通作物	ダイズ	紫斑病	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	—	平年並
		カメムシ類	—	平年並
果樹	ナシ	シンクイムシ類	平年並	平年並
		ハダニ類	—	やや多い
	カキ	炭疽病	やや早い	やや多い
果樹	共通	カメムシ類	—	多い
野菜	キャベツ、ブロッコリー、イチゴ	ハスモンヨトウ	—	平年並
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	—	平年並

気象予報（抜粋）

1か月予報（8月20日～9月19日：8月18日 広島地方气象台発表）

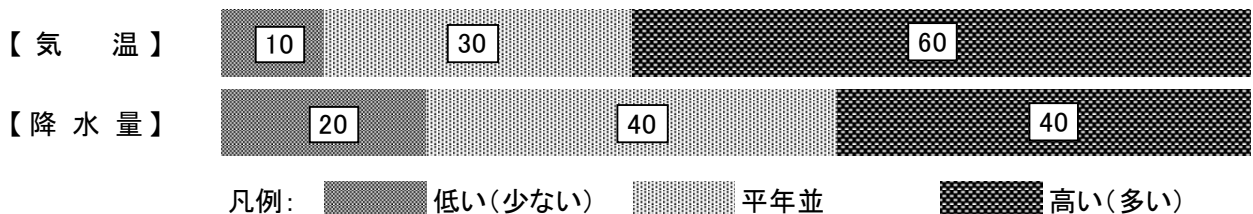
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

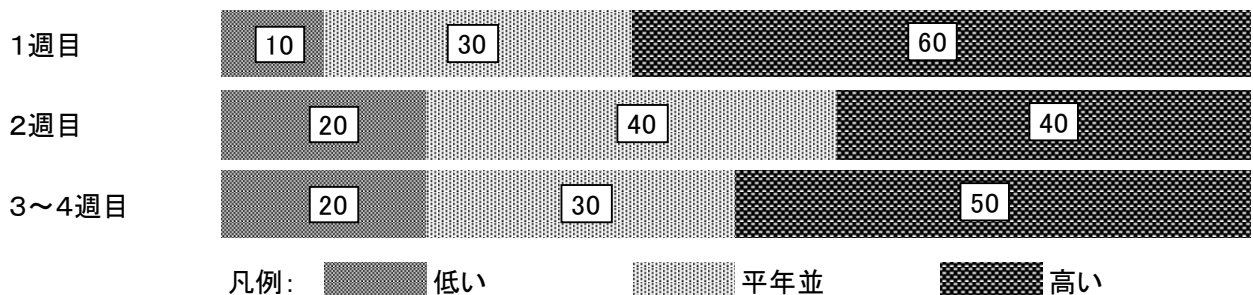
向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イ ネ]

1 いもち病（穂いもち）

（1）予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 7月下旬の葉いもち発生ほ場率は8.7%（平年：15.4%）であり、平年よりやや低い。

イ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」等の早生品種では、極一部の山間地等を除き、穂いもちの感染時期である穂ばらみ期～穂揃い期が好天で経過したことから、穂いもちの発生は助長されない。

ウ 「きぬむすめ」等の中生品種では、穂ばらみ期～穂揃い期が高温、曇雨天で経過していることから、葉いもち発生地域では穂いもちの発生にやや助長的である。

エ 向こう1か月の気象予報より、本病の発生にやや助長的な気象条件となることが予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 穂いもちは発生後の防除が困難であるため、中生品種の栽培、遅植え等により、これから出穂を迎える地域では、穂ばらみ期及び穂揃い期の2回防除を徹底する。

イ 降雨が続く場合は、雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後から降雨が3時間程度なければ、防除効果は十分にある。

ウ 上位葉における発病が多く、穂いもちの多発生が予想される場合は、傾穂期（穂揃い期の7～10日後）の防除を追加する。

エ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などのいもち病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では特に発生しやすい。

オ 平成26年にストロビルリン系薬剤耐性菌の広域発生がみられなかった地域では、平成30年より本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の再使用が可能である。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場及びその周辺ほ場における使用を控える。

カ 葉いもちの追加防除を行ったほ場では、農薬の総使用回数を超えないよう十分注意して穂いもち防除薬剤を選択する。

2 紋枯病

（1）予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 8月19日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生に助長的な気象条件となることが予想される。

ウ 防除効果の高い育苗箱施用剤が普及拡大している。

エ 以上より、本病の発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、病害虫防除指針などを参考に追加防除を行う。

3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 平坦部（特に沿岸部）
発生量 少ない

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。
- イ 現地ほ場での本種の発生は確認されていない。
- ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年より少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在、本種を対象とした防除は必要ないが、本種の発生は、ほ場間差が大きいため、ほ場における生息密度に注意する。特に、ウンカ類常発地において、育苗箱施薬及び出穂前後の防除を行っていない中生品種栽培ほ場及び遅植えのほ場では、注意が必要である。
- イ 8月下旬～9月中旬の要防除水準（成幼虫数10頭/株）を超えたほ場では、病害虫防除指針などを参考にして粉剤などで直ちに防除を行う。なお、散布の際、本種の生息場所である株元に薬剤がかかるように注意する。防除に当たっては、農薬使用基準を厳守する。

4 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、穂揃い期～乳熟期の水田における斑点米カメムシ類の発生ほ場率は78.2%（平年：78.1%）となっており、平年並である。
- イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 7月末～8月上旬に出穂期を迎えたほ場（ひとめぼれ、コシヒカリなど）で、穂揃い期～乳熟初期にかけて防除を行っていないほ場では直ちに防除を行う。
また、防除を行ったほ場においても、周辺に発生源の多い場合は防除後も発生状況に注意し、要防除水準を超えている場合は追加防除を行う。
- イ これから穂揃い期を迎えるほ場（中生品種など）では、穂揃い期～乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生が多い場合には、7～10日後に追加防除を行う。
また、出穂20日前頃に水田周辺のイネ科雑草地、畦畔などの草刈りを行っていない場合は、まず、穂揃い期～乳熟初期に草刈りを行い、草刈り後直ちに防除する。
- ウ 水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の発生を助長するので、直ちに取り除く。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 大豆の成熟期は平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。

イ 向こう3か月の気象予報から、本病の発生量は平年並であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病害虫防除指針などを参考にして、水和剤又は粉剤を使用して防除を行う。

イ 紫斑病とカメムシ類を同時防除する場合は、カメムシ類の項を参照する。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月第3半旬現在、フェロモントラップによる誘殺数は平年並である。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、病害虫防除指針などを参考にして粉剤、水和剤のスポット散布を行う。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、ほ場周辺のみならず、ほ場内での観察も丁寧に行う。

ウ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、防除適期を逸しないようにする。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの誘殺数は平年並である。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 紫斑病防除に水和剤を使う場合

(ア) カメムシ防除にネオニコチノイド系又はフェニルピラゾール系殺虫剤を使用する場合

- ・開花期後30～35日（全体の花が終わった時期）の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブルの2，000倍）及びカメムシ防除剤（ダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、キ

ラップフロアブルなど、ただし登録範囲内で最も高い希釈倍率)の混用で100L/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。

- ・カメムシ類の発生が多い場合は、前回散布の10日後に、カメムシ防除剤(病害虫防除指針などを参考にして水和剤あるいは粉剤)を散布する。

(イ) カメムシ防除に上記以外の殺虫剤を使用する場合は、2回防除を基本とする。

- ・1回目：開花期後25～30日(全体の花が終わった時期)
紫斑病防除薬剤(アミスター20フロアブルの3,000倍)とカメムシ防除剤(エルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤など)の混用で、150～300L/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。
- ・2回目：1回目防除の10日後
カメムシ防除剤(病害虫防除指針などを参考にして水和剤あるいは粉剤)を散布する。

イ 紫斑病防除に粉剤を使用する場合

(ア) 紫斑病防除にトライトレボン粉剤DLを使用する場合

- ・1回目：開花期後25～30日後
トライトレボン粉剤DLを散布する。
- ・2回目：1回目防除の10日後
カメムシ防除剤(スタークル粉剤DL、ダントツH粉剤DL、トレボン粉剤DLなど)を散布する。

(イ) 紫斑病防除にスミチオンベルコート粉剤DLを使用する場合

- ・1回目：開花期後15～20日後
スミチオンベルコート粉剤DLを散布する。
- ・2回目：1回目防除の10日後
スミチオンベルコート粉剤DLを散布する。
- ・3回目：2回目防除の10日後
カメムシ防除剤(スタークル粉剤DL、ダントツH粉剤DL、トレボン粉剤DLなど)を散布する。

ウ 水和剤、粉剤体系ともカメムシ類、その他の害虫が多い場合には、追加防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬現在、現地9地点のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の発生時期は平年並、発生量は一部地点でやや多いものの、全般的に平年並であ

る。

イ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想され、ナシヒメシンクイの第4回成虫の発生時期は、平年並の8月中旬～9月中旬頃、モモシンクイガの第2回成虫の発生時期は、平年並の8月上旬～8月下旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア シンクイムシ類の発生盛期となる8月上旬～9月中旬の防除を徹底する。

イ 薬剤は、シペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2,000倍液又はイカズチWDG1,500倍液）、テルスターフロアブル3,000倍液、サムコルフロアブル10の5,000倍液、フェニックスフロアブル4,000倍液などを使用する。

2 ハダニ類（カンザワハダニ、クワオオハダニ、ナミハダニ）

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるナミハダニの10葉当たりの寄生個体数は、0.1頭（平年：0.9頭）と平年並である。

イ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生密度が高い園では、散布量を増やし、丁寧に薬剤散布する。

イ ハダニ類は、発生種によって薬剤の効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ 薬剤は、ダニゲッターフロアブル2,000倍液、スターマイトフロアブル2,000倍液、コロマイト乳剤1,500倍、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを使用する。

[カ キ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬に、現地ほ場において枝病斑（新梢）が認められた。

イ 8月下旬現在、一部の現地ほ場において本病の発生が認められている。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、ストライド顆粒水和剤3,000倍液、ナリアWDG2,000倍液などがある。

イ 長雨で散布間隔が長くなると発病が増加するため、定期防除を徹底し、降雨前の防除を心がける。

ウ 発病が認められた新梢や果実は直ちに切除して、園外に持ち出し処分する。

[果樹共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ）]

1 カメムシ類（令和4年6月27日付けで病害虫発生予察注意報第3号を公表）

(1) 予報の内容

発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬現在、予察灯及びフェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は平年に比べて多い～やや多い。

イ 8月第3半旬現在、園芸試験場の防風樹であるサンゴジュにおけるカメムシ類の100果そう当たりの寄生数は、6.0頭（平年：2.2頭）と平年に比べてやや多い。

ウ 県予察ほ場（園芸試験場河原試験地）において、カキの果実被害が確認されている。

エ 向こう1か月の気象予報は、カメムシ類の加害活動に好適な条件であり、発生量は多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

令和4年度病害虫発生予察注意報第3号を参照のこと。

野菜

[キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）及び現地ブロッコリーほ場におけるフェロモントラップ誘殺数はやや少ない～平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の防除効果が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、被害がみられた場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはトルネードエースDF2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、ファルコンフロアブル2,000～4,000倍液、グレースシア乳剤2,000～3,000倍液、カウンター乳剤2,000～3,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーでは、若齢幼虫期にディアナSC2,500～5,000倍液、ヨーバルフロアブル2,500～5,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはアクセルフロアブル1,000～2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、ファルコンフロアブル4,000倍液、グレースシア乳剤2,000～3,000倍液、ブロフレアSC2,000～4,000倍液などを散布する。

エ イチゴでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはフェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液、トルネードエースDF2,000倍液、ファルコンフロアブル4,000倍液、デ

ィアナSC2, 500～5,000倍液、グレーシア乳剤2,000倍液などを散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）及び現地ネギほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幼虫が若齢の時期に防除を行う。この時期を逃すと防除が困難となる。

イ ネギでは、プレオフロアブル1,000倍液、トルネードエースDF

1,000倍液、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、プレバソンフロアブル5の2,000倍液、フェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、グレーシア乳剤2,000～3,000倍液、ヨーバルフロアブル2,500～5,000倍液などを散布する。

ウ ナガイモでは、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(https://pesticide.maff.go.jp/)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病害虫防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnp.ne.jp/tottori/>



ホームページ2次元コード

病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果(ナシのシンクイムシ類)などの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260
鳥取県病害虫防除所
(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)
もしくは
鳥取県農業試験場環境研究室
(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係
〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048
鳥取県園芸試験場環境研究室
(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第8号の発表は、9月7日(水)の予定です。